

W-1 手話言語学の視座と現況：マイノリティ言語を研究すること

松岡 和美（慶應義塾大学・企画責任者） matsuoka@z7.keio.jp

1. ろうコミュニティで自然に確立した手話言語とは

手話言語とは「目で見える生活様式に基づく文化（ろう文化）」を備えたろうコミュニティで用いられる視覚言語を指す。手話表現は言語音よりも産出により長い時間を要するが、視覚は聴覚よりも多くの情報を同時に認識することができる（視覚モダリティと聴覚モダリティの相違点が言語の産出・理解に及ぼす影響の考察については、Meier 2012 参照）。

手話言語においては、音声言語のように要素を連結する方法ではなく、異なる身体部位や空間で示された情報を「層」のように視覚的に重ね合わせる表現形式が発達した。一文あたりの平均語数は音声言語よりも少ないにもかかわらず、単位時間あたりに伝達できる情報に大きな違いはない（表1）。

	一文内の語数		一秒あたりの主述情報 (proposition)	
	英語	アメリカ手話	英語	アメリカ手話
話者 A	4.0	2.3	1.6	2.0
話者 B	4.9	2.3	1.2	1.4
話者 C	5.2	2.5	1.0	1.0

表1 バイリンガル話者が産出した英語・アメリカ手話による同じ内容の語りの比較
(Klima and Bellugi 1979:184-187 を元に作成)

手話言語で頻繁に使われる文法的な表現には以下のようなものが含まれる。

- 非手指表現 (non-manual expressions)
眉・目・口・頭など手指以外の身体部位を用いる表現
- 空間的な表現 (spatial expressions)
片手または両手を特定の空間位置に配置する・特定の経路に沿って移動させる・特定の空間を手指または目線で示す等、空間を利用する表現
- C L 表現 (classifiers)
表したい対象の形状・大きさ・材質などを表す表現

上記の3つが組み合わされた「R S/再構築されたアクション (role shift/referential shift/reconstructed action)」は話者自身を含む複数の人物や、異なる視点から見た場面を描写する際に用いられ、音声言語よりもはるかに短い時間で複雑な情報を伝達できる。

しかし手話言語が無文字言語であることや、ろう児の大多数が聴者の親の元に生まれる（つまり、親子で言語が共有されていない）ことも影響して、ろうコミュニティで自然に確立した手話の言語学的側面は、社会で十分に認識されていない。手話表現を音声言語の文法にしたがって並べた手指システム (signed system) や音声言語の文字に対応させて考案された指文字 (fingerspelling) を手話言語と混同する誤解は各国で見受けられ、深刻な問題を引き起こしている。

2. ワークショップの目的

本ワークショップの目的は、以下の2つである。

目的1：4つの研究報告を通して、現在の手話研究の視座の広がりを聴衆と共有する

ウィリアム・ストーキー (William Stokoe)の手話音韻論から発展したとされる手話の言語学的研究は、60年以上の歴史の中で徐々に深化と多様化が進んでいる。音声や文字を用いない手話言語の性質とその発生の考察は「人間の言語とは何か」の本質に迫る試みに大いに貢献するものである (Bauman and Murray 2014)。研究の初期段階では、ろうコミュニティで自然発生した手話が音声言語と同様の恣意性・抽象性を備えていることを示す研究が多くなされた。視覚・聴覚の違いを超越した言語の**抽象的かつ普遍的な特性**を見出す研究は現在も継続して行われている。そして分野の成熟に伴い、手話言語の最大の特徴の一つである**図像性**の考察やジェスチャーとの関連性を取り上げる研究活動も活発化している。より多くの地域で手話研究が行われるようになった結果、**類型論的考察も盛ん**になっている。ろうコミュニティで確立した手話だけでなく、**特定の地域のろう者・聴者が共有する手話**の研究も関心を集めている。近年の研究成果については松岡・内堀 (2023)を参照されたい。

目的2：手話とその使用者を取り上げる研究の倫理的配慮について考察する

ろうコミュニティで確立した手話もまた少数言語であり(高嶋2020)、その主たる使用者は社会的マイノリティとして生きる「ろう・難聴者」であることを忘れてはならない。手話言語学を含むろう者学 (deaf studies)分野の研究の多くは聴者の研究者が主体となっていて行われてきた歴史があり、それは「聴(研究)者のヘゲモニー (hearing hegemony)」という批判もある (Kusters et al. 2017:20)。そのような問題点に真摯に向き合うこと、ろう研究者が中心となって「手話・ろう研究における**当事者の主体的な関わり**」を明示的に支援することは、倫理的観点から重要性が高いと指摘されている (Orfanidou et al. 2014, Kusters et al. 2017)

ただ世界ろう連盟の緊急声明を伝えるポジションペーパー (World Federation of the Deaf 2023)にもうかがえるように、そのような試みはまだ道半ばである。本ワークショップでは、これから当該分野を支えていくことが期待されるろう者・聴者の研究者に対して、自らの研究活動を進めていく中で、マイノリティ言語とその話者の立場を尊重するための倫理的配慮についても考察を促した。聴衆との活発な意見交換を期待したい。

引用文献

- Bauman, H-Dirksen L., and Joseph J. Murray. eds. 2014. *Deaf gain: Raising the stakes for human diversity*. University of Minnesota Press.
- Klima, Edward and Ursula Bellugi. 1979. *The signs of language*. Harvard University Press.
- Kusters, Annelies, Maartje De Meulder, and Dai O'Brien. eds. 2017. *Innovations in deaf studies: The role of deaf scholars*. Oxford University Press.
- 松岡和美・内堀朝子 (編) 2023. 『手話言語学のトピック：基礎から最前線へ』 東京：くろしお出版.
- Meier, Richard. 2012. Language and modality. In Pfau, Roland, Markus Steinbach and Bencie Woll. eds. *Sign language: An international handbook*. 574-601. De Gruyter Mouton.
- Orfanidou, Eleni, Bencie Woll, and Gary Morgan. 2014. *Research methods in sign language studies: A practical guide*. John Wiley & Sons.
- 高嶋由布子. 2020. 「危機言語としての日本手話」 『国立国語研究所論集』 18. 121-148.
- World Federation of the Deaf. 2023. Position Paper on the primacy of deaf people in the development and teaching of national sign languages. <https://wfdeaf.org/news/position-paper-on-the-primacy-of-deaf-people-in-the-development-and-teaching-of-national-sign-languages/>